〈解答〉

1　1　ⓐ ウ　ⓑ エ

2　イ

3　つかせたまえ（ひらがなのみ可）

4　［例］餅が好きであるのにもかかわらず、餅をつく音を聞くのは堪えがたいと言ったこと。（38字）

5　(1)　［例］寝ること　(2)　エ

配点　1　2、4、5(1)は各2点、他は各1点　10点満点

〈解説〉

「沙石集」は、鎌倉時代に成立したとされる仏教説話集で、説話の数は約150話。内容に差はあるものの、おおむね、本地垂迹説話、諸仏霊験説話、因果応報説話、遁世往生説話など仏教説話集らしい説話を集めている。

1　餅をつかせたのは入道を呼んだ、ウ「主」である。「粥よりも、寝たるは遥かに味の吉きなり」と言ったのは、エ「ある僧」である。

2　「由」とは「こと」という意味。入道が「餅を好むと聞いた」主は、入道のために餅をつかせたのである。「由」には「わけ」や「方法」などの意味もあるが、入道が餅を好むわけは文章中に述べられていない。「方法」も話の流れに合わない。

3　古文に出てくる語頭や助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。よって、「つかせたまへ」は「つかせたまえ」と直すことができる。

4　「彼の声」とは「餅をつく音」のことである。入道は、餅が好きであるにもかかわらず、（餅が好きなあまり）それをつく音を聞くことが耐えがたく、自分に聞こえないところで餅をつかせるように言ったのである。「これ程の事」とは、このときの入道の言葉をさしている。

5　ある僧は、朝の粥も食べずに日が高く昇るまで寝ていたが、それはある僧が、朝食を抜くほど「寝ること」が好きだったからである。筆者は、このような僧を例に挙げ、「人毎に好む事あり」と述べている。これは「人それぞれ好きなことがある」という意味であるが、このような意味を持つことわざは、エ「蓼食う虫も好き好き」である。ア「好きこそものの上手なれ」は「好きなことにはおのずと熱中できるため、上達が早いものである」、イ「下手の横好き」は「下手なくせに、その物事をむやみに好み、熱心なこと」、ウ「亭主の好きな赤烏帽子」は「どんなことでも、一家の主人の言うことには従わなければならない」、オ「好機逸すべからず」は「よい機会にめぐりあったときには、それをとりのがしてはならない」という意味の言葉である。

〔現代語訳〕

餅を好む入道がいた。医者だったので、呼んで、（入道が）餅を好むと聞いて、主人が、餅をつかせたところ、この音を聞いた入道が、「おうおう」と声をあげ、叫びなが

ら、はてには畳の縁をつかんで、もだえこがれて、「ああ耐えがたい。私が聞こえないところでおつきくだされ。餅をつく音を聞くのは耐えがたくてなりません」と言ったが、これ程極端なことは希であるが、人は皆好むものがある。どんなにものを好まない人でも、ある者はつまらないものを好み、ある者は昼寝を好んだりする。ある僧は、朝の粥を忘れて食べずに、日が高く昇るまで寝ていた。「どうして朝の粥を召し上がらないのか」と人が言うと、「粥よりも、寝ているほうが、遥かに美味なものですから」と言ったそうだ。